

平成22年度 大学教育・学生支援推進事業  
大学教育推進プログラム 審査結果表

機 関 名	函館大学		
取 組 名 称	ピア・サポートによる学生協同支援		
取組学部等	全学		
整 理 番 号	A3002	取 組 期 間	3年
事 項	全学的FD、アドバイザー制、特別支援教育 ピア・サポート		

当該取組は、本事業の趣旨に照らして審査を行った結果、学士力の確保や教育力向上のための取組内容が優れているとともに、達成目標の実現性及び成果と今後の展開についても期待できると評価した。

なお、審査結果に基づく詳細は以下のとおりである。

**[特に優れた点]**

- ・就学困難な学生を対象とした現実的な取組であり、ピア・サポートをキー概念に体系的に取組体制を構築しようとしている点は評価できる。
- ・ピア・サポートを効果的に機能させることの困難さや課題などに関して一定の認識があり、現実的・実地的な取組であり、成果が期待できる。
- ・ピア・サポートを中心にピア・プレイスなどを配置し、取組に一定の多様性が認められる。
- ・ピア・サポートに参加する学生に対してピア・サポートトレーナーの資格取得など、学生へのインセンティブ付与に注目している点は優れている。

**[改善を要する点等]**

- ・多数のピア・サポーターを育成する目標の達成には多大な努力が必要であり、特に参加学生のインセンティブの強化、育成のための方法論やトレーニング内容の一層の工夫、取組の持続可能性への配慮などの検討が求められる。
- ・取組が円滑に実施されるためには、担当教員だけでなく教員全体にも相当な負担と配慮が必要であり、課題に対処する方策と協力体制の一層の検討が望まれる。
- ・就学困難な学生等のプライバシー保護を念頭にした管理体制の整備が必要である。

**[その他]**

- ・ピア・サポートなどを活用して大学を取り巻く現状課題を克服しようとする問題意識を持った取組であり、全学をあげて積極的な姿勢で取り組むことを期待する。
- ・ピア・サポーターを地域のネオリーダー育成へとつなげる発想を具体化するための組織的な対応を期待する。

大学全入時代を迎え、各大学では定員確保のため、AO入試や推薦入試など学力試験を課さない入試が増加し、その結果、学力・能力・資質に課題をもつ学生や、発達障害を抱えた学生が増加傾向にある。また、留学生を受け入れている大学では、日本人学生との交流が少なく、孤立しているケースも見られる。

本学でも同様の傾向がみられ、発達障害を疑われる学生が近年増加し、全体の10%前後いると推測される。彼らの多くは、人間関係や学習困難を契機として不登校に陥り、休学や退学、進路未決定、ひいてはニート、引きこもりへと結びつく事例が多い。入学生が多様化する状況下では、学生支援にも多様化が求められる。本学は地域密接型の小規模校であるが、それは教職員全体できめ細かい学生支援を行えるという最大の利点でもある。本プログラムは、学長を本部長とした「大学版特別支援教育」であり、〈教育支援〉〈ピア・サポート〉〈ピア・プレイス〉の3つのプロジェクトを機能的に展開し、地域との共生を目指すインクルージョン社会の実現に貢献する。

①**教育支援プロジェクト**－全学生に対する個別の教育支援計画を策定し、全教職員によるチーム支援を実施する。「学習支援」「生活支援」「パーソナル支援」「キャリア支援」の全4領域からなる包括的支援を実施する。学生の基礎学力、学習意欲、生活実態といった広範な学生評価情報、支援実践のデータベース化を図ると同時に、個別支援プログラムの開発・実施を行い、個々のニーズに基づいた支援モデルを構築する。全教職員が、データベース化された学生評価情報（学生ポートフォリオ）をもとに、彼らの成長や変化について観察・把握を積み重ねていく。また、学生個々が抱える問題・課題に対しては、家庭や医療、福祉機関と密接に連携し、早期発見・早期対応を図る。

②**ピア・サポートプロジェクト（PSP）**－「学生による学生支援プロジェクト」の参加者を全学的に募集し、学生相互の支援体制を構築する。トレーニングにより、人間関係づくり、ソーシャルスキル、コミュニケーションスキル等を習得した学生は、ピア・サポーター（学生リーダー）となる。彼らは、特別支援対象となる発達障害を抱えた学生や学業不振者ばかりでなく、不安を抱えた新入生や異文化・異言語という環境の中で多くのストレスを抱える留学生等に対して、学習・生活の両面から広く支援活動ができる。また、すでにピア・サポートを実施している他大学とも交流し、学生同士の連携を図る。

③**ピア・プレイスプロジェクト（PPP）**－ピア・サポーターたちが中心となって運営するコミュニティ、それがピア・プレイスと呼ばれる「第三の居場所」である。部活動やサークルにも参加せず、所属するゼミでも孤立している学生たちの特徴として挙げられるのが、コミュニケーション不足・自己有用感の欠如である。ピア・サポーターたち自身が、このような学生への支援・援助を展開することにより、人間的成長を遂げ、卒業後の社会においてもリーダーシップを発揮できる。また、地域の中学・高校にボランティアスタッフとして参加し、交流を深めることで、中高生は数年先のキャリアターゲットを獲得でき、大学生は自らの成長と自己有用感を高め、地域コミュニティと連携したキャリア教育の学びの循環システムを構築できる。本プログラム実施には、発達障害の知識と具体的な対応方法を学ぶ、全教職員対象の研修が必要である。大学版特別支援教育モデルを構築し、他大学にも広く貢献できる取り組みを実施する。